

パソコン・インターネットを活用した中国語教育

中西 千香

(愛知大学大学院中国研究科博士後期課程)

How to Use Information Technology in the Chinese Classroom

Chika Nakanishi

目次

0.はじめに

1.なぜ中国語学習にITなのか

2.授業内容について

3.準備として行ったこと

4.授業開始～学習者へ課した課題から何が見えたか

5.失敗談

6.学習者の反応

7.まとめと今後の展開

【参考文献】

【付録】学習者の課題作例

0.はじめに

本稿は、中国語教育・中国語学習の中でどのようにITを活用できるか、通常の授業とは異なった形でアプローチすることは可能かという問題に対し、一つの試みとして紹介するものである。語学学習の方法や外国語に触れる媒体も多様化しつつある今日、また同時に高校や大学においても、ITに関する教科は年々重視されてきた。大学のレポートや卒業論文のパソコンによる文書作成は常識になりつつある。また、中国の各方面や中国語を専攻している学生にとっても、資料集め、情報交換のアイテムとして、ITの活用は切っても切れない存在になっている。とはいえ、どのように中国・中国語理解のためにITを活用できるかについて、まだ使いきれてない学習者も多いであろう。どのような形で中国語とITを結びつけ、ITの面ではメディアリテラシーの向上、語学の面では学習者に学習者自身の語学力向上を考えてもらえるか。以下、本学でのオープンカレッジ講座「中国語でパソコン<sup>1)</sup>」で試みた実施例とともに、本講座で目指したものの、開講までの準備、実際の授業進行、そこで起こったトラブルなどを通して、ITと中国語を融合させた授業のあり方、学習効果について考えていきたい。

---

<sup>1)</sup>2004年9月～12月に本学豊橋校舎にて開講、全12回、パソコン・中国語とも初級レベル(中国語検定で言えば、四級または四級を目指す人あたり)を対象として授業を行った。実際は、それ以上のレベルの学習者が参加していた。通常10人以上の場合は授業補助がつくが今回は少なく、授業補助(TA)はつかなかった。

また、文末に本講座受講者の課題の実践例の紹介をしておくので、今後の教学、学習の参考にされたい。

## 1.なぜ中国語学習にITなのか

中国語をある程度学習してきた時点で、何らかの形で生の中国語に触れる機会を与えることは重要である。その時にどんなものが考えられるかと言えば、テレビ、ラジオ、または小説などの生教材であろう。しかし、生教材は、初級者にとってはなかなか手の出しにくい材料であり、使用する際にも教師側が配慮すべき点は多い。そこで、ITの力を借りようというわけである。ITと言うと、通常思いつくのはe-learning等のCALL<sup>2)</sup>教材であろう。CALL教材は、教師側がプログラミングからすべてを手がけたシステムの中で、学習者が中国語を学び、そして学習者はしかれたルールの上を進むというものである。この場合は、学習者側、教師側、双方が学習者の形となって表れた進捗度をみることができ、どの問題でよくつまづいているかなど、理解しやすく、また管理もしやすい。CALL教材にはこのような利点があるだろう。しかし、本講座はより自由な学習展開を期待したものであり、そのねらいは以下の5点にまとめられる。

### ①学習者のi+1の手助け

もちろん教師側も操作上や授業運営上の手助けはするが、学習者にも独自のi+1<sup>3)</sup>を探してもらおう。つまり、これは学習者自身の中国語学習を楽しんでもらいたいという考えからである。

### ②学習効果、モチベーションをさらに高める、情意フィルター<sup>4)</sup>を下げる

①の先にある結果とも言えるだろうが、自分の興味ある分野、ニュースなど見つければ、それを探そうという気持ちが生まれ、次にはそれを理解しようという気持ちへと変わっていくだろう。そうなれば、学習に対する抵抗もなくなり、同時に学習への意欲を高めることが可能である。そして、学習者自身の語学力向上へと促すのである。

### ③中国語とパソコンのコラボレーション

#### ～入力マスターでピンイン理解の強化、コミュニケーションツールを増やす

入力練習という作業自体は、ピンインを理解していることが前提である。入力練習やインター

<sup>2)</sup> Computer-Assisted Language Learning の略

<sup>3)</sup> Krashen, Stephen D. (クラ申) が提唱するナチュラル・アプローチの習得理論の中心となる5つのインプット仮説の1つ。言語の習得には、現在の習得レベルよりほんの少しだけ高いレベルの内容を学習者に与えて、理解させていこうというもの。「i」は現在の学習者の熟達度を指す。ただ、「i」、1の定義、その内容というものについては、これと言った指標はなく、教師のさじ加減で決めているという漠然としたものである。学習者も様々なので細かく言えば個々にあるわけで、簡単にこういうものと決まるというものでもないだろう。

<sup>4)</sup> 同じく Krashen, Stephen D. が提唱する5つの仮説の1つ。学習者が外国語を学ぶ際、学習事項を受け入れる時の心的圧力や抵抗感を壁にみたてたもの。つまり、「情意フィルター」を低くすると、語学習得を促すが、逆に「情意フィルター」が高いと学習者はスムーズに学習事項を受け入れられない。これは学習者側よりも教師側がコントロールすることである。

ネットに触れる作業を通して、語彙や表現のパターンが増えるだろう。これは、通常の中国語学習の中で、会話能力を高めるのと同じで、学びながら入力ができる量も自然と広がる。中国語を理解していて、パソコン・インターネットを理解していれば、おのずと中国語を入力してできることも増えるのである。例えば、簡単などころから言えば、検索サイトからのキーワード検索、そして、語彙表の作成、簡単な文章から手紙や E-mail、ビジネス文書へとつなげ、これに併せて語彙力とタイピング速度があがれば、リアルタイムでのチャットまで楽しめる。できることが少しずつ増えていくことは、学習者自身の中国語のレベルの向上を肌で感じられるひとつのバロメーターとなる。

#### ④パソコンの関連語彙に触れる、メディアリテラシーの強化

当たり前になると思うが、せっかくパソコンを通して中国語理解をしようとしているので、最低限のパソコン中国語用語をおえておけば、ただ見るだけの中国語の HP ではなく、もっと一歩進んだ活用法がわかる。例えば、データのダウンロード方法、インターネット利用の際に危険回避方法等、語学学習的側面の強化と同時にメディアリテラシー強化を目指す。

#### ⑤与える授業ではなく、教師と学習者のコラボレーションを期待する

通常の語学の授業の場合は、教師側から与える授業になりがちである。それをどうにか打破できないかという思いからも今回の授業を試みた。ある程度の制限のゆるい課題にすることで、学習者たちが自由な発想で課題を行えるのではないかと。

とかく、高校生、大学生をはじめとする学習者は、自己の自由な発想を外へ表現することは苦手である。頭の中ではいろいろと考えているのにもかかわらず、いざみなの前でと言われると引っ込んでしまうのが最近の傾向である。教師側がある程度誘導した上で、あとは学習者主体で、個々の思うところで展開してもらって授業を本講座で目指した。

勿論、パソコン・インターネットで中国語を学ぶより、通常の小説などの講読の授業の方がより深く中国・中国語を理解できるのではないかと思うかもしれない。だが、今回は全く違った視点から、中国・中国語理解のためのツールとして、パソコン・インターネットを使いこなし、中国語学習の視野を広げてもらうことこそが、この講座のねらいであった。

## 2.授業内容について

ここでは、実際に行った授業の具体的内容について述べたい。

初回に、まず、①学習経験（年数、学習機関の別）、②ピンインの理解度、③PC の使用状況についてのアンケートに答えてもらうことで、学習者の状況を把握した。

また、大学の PC 使用に当たっての注意点、ログイン・ログオフ方法を説明した。大学 PC のログインには「学籍番号+パスワード」が必要で、初めに初期パスワードから自らのパスワードに変更しなければならない。この作業はキーボード入力が慣れていない人ほど時間がかかる。大学の PC と家庭用 PC では異なる点が多いため、相当の時間を使った。

授業は全12回で、以下のように行った。

第1回 インTRODクシヨン 中国語のピンインについて	あくまでも introduction 基本的操作法を学ぶ。ただ、中国語そのものの理解や入力練習は不可欠。ピンインの理解にも有用
第2回 ピンイン復習 中国語 IME の設定方法 中国語 IME の入力方法	
第3回 IME の入力復習 実践 記号の入力方法 (キーボード配列) 文字コードについて	
第4回 入力練習 日中混在文作成 フォントの話 課題: 自己紹介表作成	
第5回 入力練習 ピンインおよびピンインルビの入れ方	
第6回 ピンインルビ入力復習 中国語の記号について ワード操作法 課題: チラシを作ろう	
第7回 画像の挿入復習 中国語でパソコンの名称 課題: 年賀状 or クリスマスカード作成	
第8回 メール・手紙について Hotmail でメールを送ろう。 設定方法、送受信方法 チャットについて	中国事情等 中国語学習の広がり伝える授業。レベルによって課題の完成度は異なってくる。
第9回 インターネットについて 中国で使用頻度の高い検索サイト 検索方法 課題: ①サイトから新出単語を紹介しよう	
第10回 インターネット検索サイト「百度 Baidu」について、 百度を使いこなそう。 課題: ②中国・中国語理解のサイトを紹介しよう	
第11回 翻訳サイトについて ソフトアプローチ① ブロードバンドの醍醐味 ネットで中国のテレビを見よう! 課題: ③私のすすめる中国語学習法を紹介しよう	
第12回 ソフトアプローチ②音源、VCD・DVD を使った中国語学習 私のすすめる中国語学習法発表 (一人5分) 最終アンケート	

前半部分(第1回~第7回)についていえば、中国語入力に慣れながら、語彙を増やしたり、文章を入力する作業をした。日中混在文とは、同じ文書内に中国語と日本語が混ざったものであり、中国語の文章を入力して、その文章の日本語の翻訳を同時に入力して、日本語 IME と中国語 IME の切り替えに慣れてもらうという形をとった。入力自体は練習なので、ピンイン理解が支障となかなか早く打てない学習者にはピンインルビつきの補助教材を与えた。文章の文法レベルは特に難しいものではないが、中級に近い人でも多少文法的にひっかかる内容のものにして、文法事項にも少しは意識してもらうようにした。

また、作成する文書については、Word の知識が多少必要になる。時間内で完成させられるということにも心がけながら、学習者は Word の操作法(ピンインルビ入力、画像挿入方法、ワードアート

など)も、少し勉強をしてもらった。

後半部分(第8回~第12回)は、文章を打つ作業から派生した形で、手紙の書き方を学び、そしてメールへと進めていった。Hotmailの中国語切り替えの方法を学んだ後は、中国語で書かれたコマンドについて説明した。そして、送受信の練習をして、実際に文章を打つての実践を行った。本講座では、メール送受信の実践はあまりたくさん時間をかけなかった。もちろん時間外で、友達などに送るメールなどについて添削を頼まれることはあったが、特に課題を課して、書きなさいということとはしなかった。それでも、初めてメールを持った年輩の学習者には、とても新鮮だったらしく、今まで手紙でしかやりとりしていなかった友人とメールでやりとりできるようになったことを喜んでた。これは単に、「知っている」か「知らない」かの世界であって、教師はただ学習者の「知らない」を「知っている」に変える作業の手助けをしているのにすぎないのである。

### 3. 準備として行ったこと

いつでもどこでものオンデマンドをめざし、また学習者が授業の復習や練習をしたり、授業に対してより深い理解をしてもらうために以下のことを行った。

- ① HP 開設 (毎回の授業の内容を簡潔に伝える。休んだ人も何をしたかわかるように。)
- ② 毎回レジュメを作成し、授業の前までにネットワークフォルダで提示する。プリントアウトをして持ち帰り可能。(復習してもらう目的で。)
- ③ タイピング練習はいつでもできるように、Web 上に公開してできるようにした。タイピング練習は簡単な単語に限定して、単音節、二音節、二音節以上、動詞+目的語の入力の練習問題を作成した。これは授業開始前に、ある程度作っておいた<sup>5)</sup>。



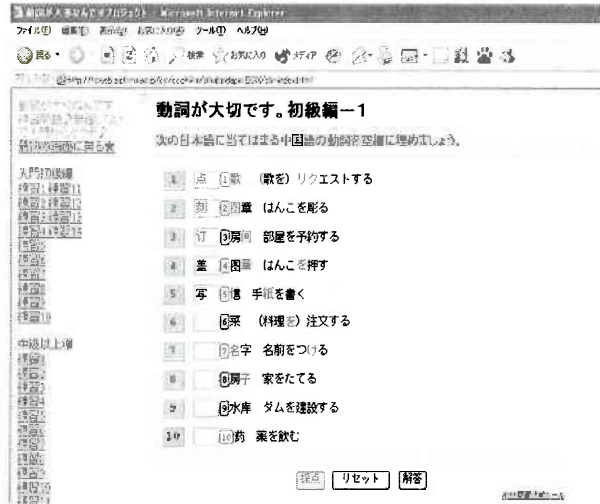
- ④ チャットを紹介する時は、中国語ができる仲間に頼み、中国語でのチャットの実演をした。
- ⑤ インターネットを始めるまでにサイトを紹介するページを作成して、学習者を誘導しやすくした。

←【図1】Web上タイピング練習

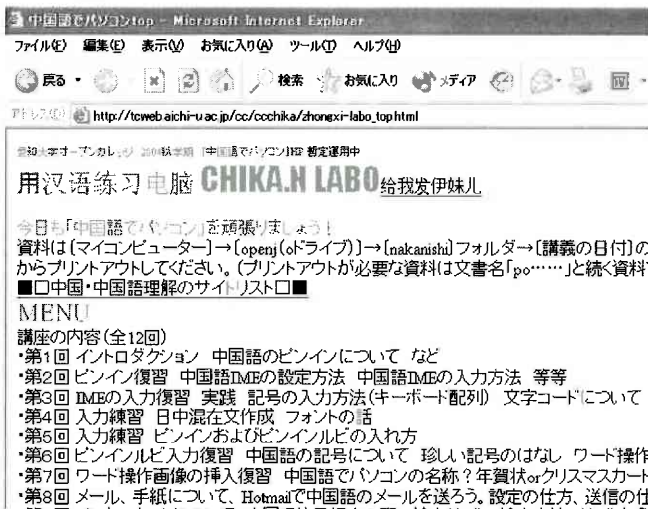
ピンイン+声調で入力をしていく

<sup>5)</sup>タイピングの語彙はあくまでも入門・初級の単語に限定し、国家对外汉语教学领导小组办公室编《高等学校外国留学生汉语教学大纲》(北京語言大学出版社)の1年生習得単語に絞り、XMLのデータベースにして、JavaScriptで問題に加工した。また、JavaScriptのプログラムは本学非常勤講師、齊藤正高先生のものを使わせていただいた。この練習はIE6.0以上、中国語IMEがインストールされていることが必須条件となる。また、動詞目的語構造の練習については、Web問題作成ツール(<http://www.fureai.or.jp/~irie/webquiz/>)を利用した。中国語フォントには対応していないので、少々加工が必要になる。

【図2】動詞+目的語構造入力練習  
当てはまる動詞を中国語IME  
を使って入力する。



【図3】本講座のHP ([http://taweb.aichi-u.ac.jp/chika/zhongxi-labo\\_top.html](http://taweb.aichi-u.ac.jp/chika/zhongxi-labo_top.html))



#### 4.授業開始～学習者へ課した課題から何が見えたか

入力練習について言えば、授業を進めていくうちに、学習者のキーボード入力の速度に個人差がでてきた。学習者の中に、中国語のピンインはわかるが、入力が遅い、また、入力は支障ないが、中国語のピンインがあやふやという人がでてきた。後者はピンインの補助教材をつけることで解消できたが、前者は意外に苦戦していた。ただ、今回は入力の速度を改善するという授業目的ではないので、大きな問題にはならなかったが学習者にあせりがみられた。

2.で説明したように学習者が IT 活用の醍醐味を感じ、そして本領を發揮できるのは8～12 回になる。8回目あたりからインターネットの利点、つまり外とのつながりを感じながら中国語を学ぶ

ことになる。メール等の個人間のやりとりを練習した後、インターネットを利用した練習に重点を置いた。ここでは、中国でよく使われているポータルサイトや検索サイトを紹介するとともに、実際入力して、検索し、情報を取るといった作業をした。また、クイズ形式で、自分でサイトに当たって調べて、解答してもらおうという課題も出した。

実践に入ってから約4回の講義の中で、学習者主体の授業にするために、3つの課題を学習者に課した。課題は学習レベルに関係があってもその学習者の背丈で行えることに重きを置いた。さらに課題だけに集中してもらうために課題作成のためのフォーマットを作り、その中に入力してもらうようにした。そして、作成した課題は、ネットワークフォルダに入れてもらい、それを教師がチェック、修正<sup>6)</sup>をしてから、他の受講生にも見られるようにした。

具体的な課題については、受講者の実際の作例は文末の付録を参照してもらいたい。課題の内容について、簡単に紹介しておく。一つ目の課題は、受講生には好きなサイトを選んで、そのサイトにでてくる語彙の中で自分にとっての新出単語を出してもらい、そこにピンインルビ、日本語訳をつけてもらうという作業をした。あとからそのページを確認できるように、サイトのアドレスも表に入力してもらった。サイトの選択は、学習者に委ねた。この課題は学習者の数だけ、バラエティに富んだものになる。ひとりの目でみたサイトはまさに一つしかないが、その人数が増えて、それを交換し合えば、より多くの知識を獲得することが可能だ。これがまさに教師と学習者のコラボレーションなのである。そうなった場合に実は大変なのは教師側である。一つ一つチェックの上、学習者に戻さなければならない。時として、それが新語（または、それに準ずるアルファベットやアルファベット交じりの中国語）、また古典的表現だが現代風にアレンジされていたりするものなど、理解しがたい場合もでてくる。それらを確認するためにも、出所であるサイトのアドレスは必要である。前後の文からつかめきれない場合は、ネイティブの力を借りることもなる。今回の課題の場合は一人2サイト、各サイトに10個の単語を入力できるフォーマットを作ったが、人数が多い場合は、数の調整が必要である。また、これを発展させれば、時事中国語など上級の授業でニュースの文章のうえでいるサイト+単語帳を作成させて発表してもらうこともできる。また、二つ目の課題は、一つ目の課題を発展させた形で、学習者のおすすめサイトを語彙やおすすめポイントなどフォーマットに入れて紹介するというものであった。

三つ目の課題は、授業の最終回にこの授業を通して、学習者が独自でどういった中国語学習法があるかということを考えてもらい、フォーマットに入力するという作業をした。そこまでに、教師は、パソコン・インターネットを通しての中国語学習法を教師の持てる限りの知識は紹介済みである。また、ネットから音声資料、映像資料を入手、テレビやネットの動画を視聴することも教え、実践済みである。しかし、教師側の発想や把握しているサイトの数も正直限界がある。そこで、この授業を通して得たものを利用した学習法というものを個々に紹介してもらったのである。彼らの

<sup>6)</sup> ネットワークフォルダは権限があり、受講者は一度提出すると修正ができない。教師は修正可能の権限になっている。

実践例というわけではなく、この授業を通しての提案でもよいことにした。ここでのねらいはそれぞれが独自のものを仲間を示すことであった。中国語学習のきっかけ、方法、これまでの経路、興味もばらばらの学習者が集まってそれぞれの勉強法を聞けるのは学習者にとってとてもよい刺激になる。

このようにして、通常与えるだけになりがちな語学の授業に、もっと双方向的なものにすることをこの授業を通して、それを可能にした。

## 5.失敗談

以下に箇条書きではあるが、授業中のシステム上の失敗事例について示しておく。本学でこそ起きた事例かもしれないが、どのようなPC環境であっても、このような事例は設定やセキュリティ上、起こりうる可能性は高いので注意されたい。

失敗その1：受講生が中国語入力不可能、またネットワークフォルダが見られない。

原因：大学の校舎が違ったこと（名古屋<sup>7)</sup>と豊橋）で権限の違いが生じた。これは大学のPC管理者に権限を変えてもらうことで解決した。

失敗その2：ピンインルビが入らない。

原因：教室ごと、PCごとでソフトのインストール状況が異なるため、同施設内の教員用PCや他教室のPCはピンインルビが入るのに、使用教室PCでは入らないという状況が起きた。原因は結局不明だったが、対策としては、教師は先に動作確認をする必要がある。

## 6.学習者の反応

学習者の授業終了後のアンケートをまとめると以下のようになった。

中国語の入力のしくみは理解できた／入力の速度は速くならなかった／ピンインの理解は、以前より少し深まった／メールやインターネットはほぼ理解できたが、授業で見たサイト以外を見るのは抵抗がある（セキュリティの問題など）／授業を通して、ポキャブラリーは少し増えた／中国語・中国についての理解も少し深まった／もっともっと練習や実践をしたかった（12回では足りない）／少人数でよかった／メールができてうれしかった／もっとインターネットを使いこなせるようになりたい／後半が消化不良になった……

上の感想から、筆者の感想・反省を述べると、一通りの中国語学習とインターネットを結びつけるという目的自体は達成できたようだが、学習者自身の定着、向上という点ではもう少し時間をかけてもよかったようだ。しかし、ここからの活用は学習者自身にかかっているところが多く、よりパソコンに触れる時間を増やして、作業になれて、パソコン・インターネットから中国語を学ぶ楽しみをより多く探してもらうしかないのである。

---

<sup>7)</sup> 名古屋（三好）校舎では、当時ChineseWriterを入れていたので、マイクロソフト社の中国語IMEを使えるような設定がされていなかったことで、この問題が起きたと考えられる。



## 7.まとめと今後の展開

以上、授業の実施例を見てきたが、語学教育のために IT を活用する際、教師側は次の点に注意する必要がある。

- (1) きめ細かな資料と教材作成→自宅等での復習を期待、大学の PC だと制限があるのですべてはできない。
- (2) インターネットを活用した課題は、無限の可能性を持つ→語彙理解、文章、表現理解、文化、時事、新語、専門分野など、自力で調べる手段の一つであることを喚起する。
- (3) 正しい情報リテラシーの指導の場としても重要→日中のサイトの違いを知り、また、言葉の乱れや情報の正しさの分別をし、自分で見、選別する能力を養う。
- (4) 大学のシステムでできること、できないこと、家庭用 PC との違いなどを確認し、また大学でもっていいこと、してほしくないことを整理しておく。

例：学内では MSN メッセンジャーは入っているが学生権限では使用不可

これ以外のチャットアプリケーションもインストール禁止（ヤフー、QQ、など）

- (5) 学習者が自宅に帰っても（講座が終わっても）使ってみようという気持ちを起こさせることが大切。…モチベーションの持続→自立した学習者へ

本稿で紹介した事例は決して CALL 教室でなければできないという内容ではない。学習者が何らかの形で、ピンイン入力をすでに習得しているなら、本講座の後半で課した課題のみを通常の語学授業の中で、学習者に課することも可能である。また、課題の内容も教師の工夫次第で様々な方法で出すことができたりと、応用は可能であり、そして無限である。例えば、新聞を題材にして、加工した教材をもとに「時事中国語」という授業を設けているところがあると思うが、教材になってしまうと、すでに時間が経過してしまっているため、新鮮味がなくなってしまうというデメリットがある。そこで、学生をグループに分けて、それぞれのニュースについて調べてもらうのもいいだろうし、一つのニュースをいろいろな側面から切り取り、各グループで発表してもらうという授業展開も発展可能である。これがさらに発展して、個々のレポートやゼミ発表になり、また卒業論文へ導いていくことができるのではないかな。

情報リテラシーという面では、学習者自身が情報に対する価値の見極めをできなければならない。また、情報の大切な面とその裏側にある危険な面の両面から物事をみたり、判断したりしなければならない。これはある程度、教師側でコントロールしたり、指導したりしなければならないだろう。

このような、あまり型にはめず、ある程度の部分までは導き、あとは学習者の興味に基づいて、さらなる興味をかきたてるというような授業スタイルこそが、自立した中国語学習者を育てるのではないかな。

【参照文献】

社団法人 私立大学情報処理教育協会

『大学教育への提言 授業改善のための IT の活用』 2001 年版

鎌田修・川口義一・鈴木睦編著 2000 『日本語教授法ワークショップ (増補版)』 凡人社

齊藤正高 2004 「中国語学習コンテンツの作成 XML データベースと JavaScript をつかって」

愛知大学情報メディアセンター紀要『COM』 Vol. 15/No. 1 2004. 9

竹蓋幸生・水光雅則編 2005 『これからの大学英語教育

CALL を活かした指導システムの構築』 岩波書店

本稿は、第 3 回中国語教育学会全国大会 (2005 年 3 月 26 日、於東京外国語大学) での発表を元に、  
加筆したものである。

【付録】学習者の課題作成例

●HPから新出単語を見つけて、みんなに紹介しよう！（学習者A<sup>8)</sup>）

サイト名	雅虎中国		
内容（ジャンル）	検索サイト		
アドレス	http://cn.yahoo.com/		
単語	日本語訳	単語	日本語訳
fángchǎn 房 产	不動産、家屋敷	shēngtài 生 态	生態
lùntán 论 坛	論壇	pāimài 拍 卖	オークション
xiàngcè 相 册	アルバム	liǎng' àn guānxi 两 岸 关 系	大陸と台湾の関係
liáotiān 聊 天	チャット	Mòxīgē 墨 西 哥	メキシコ
gōngwénbāo 公 文 包	ブリーフケース	À gēntíng 阿 根 廷	アルゼンチン

サイト名	北京故宫博物院		
内容（ジャンル）	博物館		
アドレス	http://www.dpm.org.cn/		
単語	日本語訳	単語	日本語訳
Zǐ jìnchéngkuàixùn 紫 禁 城 快 讯	紫禁城最新情報	wǎngshàngbówùyuàn 网 上 博 物 苑	ネット博物展
wénhuànmǎidiàn 文 化 买 店	ミュージアムショップ	dàshì jì 大 事 记	年代記
gōngdébǎng 功 德 榜	寄付金の芳名録 (ここでの意味)	zǒngshuō 总 说	総説
yǒuqíngliánjiē 友 情 连 接	リンク	guānyúběnzhan 关 于 本 站	このサイトについて
lìlín 莅 临	来臨	diǎnjīchákàn 点 击 查 看	クリックして 詳しく見る

<sup>8)</sup> 学習者Aは週1回の大学のオープンカレッジで学び始めて2年目の婦人。韓国語もできるせいか、外国語学習に抵抗はない。この講座にでながら、PCを買い換えてしまったほどのモチベーションの高い学習者。

●HPから新出単語を見つけて、みんなに紹介しよう！(学習者B<sup>9)</sup>)

サイト名	新浪网娱乐 (11/27 裴勇俊伤心表示道歉)		
内容 (ジャンル)	新聞		
アドレス	http://ent.sina.com.cn/		
単語	日本語訳	単語	日本語訳
yǐngmí 影 迷	映画ファン	ǒuxiàng 偶 像	偶像 (アイドル)
shāngxīn 伤 心	傷心になる	zhàopiànzhǎn 照 片 展	写真展
yíhàn 遗 憾	残念 (である)	dàoqiàn 道 歉	謝る
xiànchǎngzhíbō 现 场 直 播	現場生中継	yīyōng'érshàng 一 拥 而 上	(先を) 争ってどっと 取り囲む
bānchē 班 车	定期バス	Péi Yǒngjùn 裴 勇 俊	ペ・ヨンジュン
Zhāng Dōngjiàn 张 东 健	チャン・ドンゴン	Lǐ Bīngxiǎn 李 秉 宪	イ・ビョンホン
Yuán Bīn 元 斌	ウォン・ビン	Cuī Zhìyǔ 崔 志 宇	チェ・ジウ

サイト名	第 29 届奥林匹克运动会组织委员会		
内容 (ジャンル)	スポーツ		
アドレス	http://www.beijing-2008.org/73/21/homepage211612173.shtml		
単語	日本語訳	単語	日本語訳
Cán' àohuì 残 奥 会	パラリンピック	dì jiāoshēnbàn 递 交 申 办	申請書を提出する
zhāotiē 招 贴	募集のポスター	jìngzhēng 竞 争	競争
zhēngjí 征 集	公募する	chōngcìjiēduàn 冲 刺 阶 段	ラストスパート
píngxuǎnhuódòng 评 选 活 动	選評する	fēnggéduōyàng 风 格 多 样	多様な風格
zhènhànrénxīn 震 撼 人 心	人心を驚かす	Yǎdiǎn 雅 典	アテネ
rùwéihòuxuǎn 入 围 候 选	選挙候補に入る	Bālí 巴 黎	パリ
Lúndūn 伦 敦	ロンドン	Nīyue 纽 约	ニューヨーク
Mòsikē 莫 斯 科	モスクワ	Mǎdéli 马 德 里	マドリード

- 9) 学習者Bは年配の男性だが大学で第一外国語として中国語を学んでいる現役である。当時4年生。PCも問題なく使える。

課題：インターネットなどを駆使してどんな中国語学習ができるか。

なまえ（学習者A）

私のすすめる中国語学習法 タイトル

具体的な方法：

この講座で習得して早速実行しているもの

- 教科書の暗誦部分をピンインルビ付で印刷して持ち歩いている。  
電車の中や待ち時間に取り出して見る事が多く、時には授業中の暗誦にカンニングペーパーの役割も果たしている。
- 友人とそれぞれの教科書の例文を収めたファイルをメールに添付して披露しあい、質問や訂正をしている。

今後の学習方法のアイデア

「NHKワールド」のインターネットサービスの利用

「ラジオ日本」が発信する Daily News は原稿も掲載されているので、それを目で追いながら聞く方法。（知らない単語や文法が多すぎる現時点の実力では個々の単語をあまり調べているとかえって面倒になって続けられなくなりそうだから）

ラジオやテレビ講座のように時間を気にせず、その場で繰り返し聞くことができ、国内で放送されるニュースに近いので内容も予測できる。

また外国人向けの「やさしい日本語講座」もスキットが短いので利用しやすいかもしれない。

[http://www.nhk.or.jp/toppage/21\\_languages/](http://www.nhk.or.jp/toppage/21_languages/)

日本語学習中の中国人と中国語学習中の日本人とのネット上の相互学習。

両言語に精通したリーダーを中心に、主に作文・添削を行う。最近見聞きする「ブログ」の仕組みと関連させたものができないだろうか。

課題：インターネットなどを駆使してどんな中国語学習ができるか。

なまえ（学習者B）

私のすすめる中国語学習法 タイトル

「できるだけ中国語の環境にどっぷりとつかる」

具体的な方法：

「多説」たくさん話す。たとえばお気に入りの内容のわかった文章、子供向けの本（ピンイン付）などを繰り返し音読する。半年もすれば、暗誦できるようになる？

「多聴」そしてたくさん聞く。おすすめサイトはくラジオ日本オンライン<<http://www.nhk.or.jp/rj/>> にアクセスして日本語を選ぶ。次にライブではなくその下の「オンデマンド」の中から中国語（华语）を選択すると<<華語新聞>>となり、右側のヘッドラインをクリックすると左側にその記事の全文がでる。

華語新聞の画面で、[收听]をクリックすれば、ニュースが聞ける。これはオンデマンドとして何時でも聞けるので便利。（リアルワンプレイヤーまたはウィンドウズメディアプレイヤーが必要です。）NHK国際放送の中国語ニュースはNHKラジオ第二でも、毎日午後一時から10分間放送されています。

他の中国語番組&ニュースは、（外国の放送が良いわけは・・・）

VOA（Voice of America）のオンデマンド <http://www.voanews.com/chinese/>

BBC World Service は<http://www.bbc.co.uk/worldservice/index.shtml>

中広在线（中国广播网の在线直播）<http://211.89.225.2/>

あとは無難なところで、「NHKの中国語講座」の過去に放送したもの。CD付の本が出ているので、本を見ながらあるいは見ないと、繰り返し聞く。

その他・備考（長所・短所、問題点など）：

しかしいずれのラジオも早すぎて、文字がなければ内容も听不懂，看不懂（チンプンカンプン）です。比較的外国の放送がいい、ゆっくり、発音がよい。・・・と思う。

ほかDVD、VCDなどデジタルなものがいい、繰り返し、少し戻る、適当に探すなどが簡単である。音楽もCDを聞き流すのはいいけれど、声調はわからない。了や的など発音が変わってしまう場合もある。